

# ロレンス

愛の予言者

倉持三郎

英米文学作家論叢書





ロレンス

愛の予言者  
倉持三郎  
冬樹社

### 著者略歴

倉持三郎（くらもち さぶろう）

1932年生れ 東京教育大学文学部卒業，同大学院  
修了 イギリス文学専攻 現在，東京学芸大学助  
教授 著書，『D. H. ロレンス——小説の研究』  
（荒竹出版）『ロレンス』（英潮社）『現代イギリス  
文学入門』（評論社，共著）『ハックスリー』（研  
究社，共著）訳書，ロレンス『三色すみれ・いら  
くさ』（国文社，共訳）その他

英米文学作家論叢書 13

---

### D. H. ロレンス

昭和53年6月2日 初版第1刷発行

著 者 倉持三郎

発行者 高橋直良

発行所 冬 樹 社

東京都千代田区神田神保町2-18

郵便番号101 振替 東京8-7757

電話 東京 03(264)0346(代表)

印 刷 誠之印刷株式会社

製 本 株式会社 美成社

装 幀 者 三嶋典東

---

©Saburo Kuramochi 1978 0098-10268-5190

本書の内容の一部あるいは全部を，無断で複写複製（コ  
ピー）することは，法律で認められた場合を除き，著作  
権者および出版社の権利の侵害となりますので，その場  
合には予め小社あて許諾を求めてください。

## 目次

|          |     |
|----------|-----|
| まえがき     | 5   |
| 一 想像力の根  | 10  |
| 二 進 水    | 32  |
| 三 未来の女性  | 62  |
| 四 支配する母  | 77  |
| 五 情熱の誇り  | 115 |
| 六 星の均衡   | 143 |
| 七 男性優位の夢 | 167 |

|                |     |
|----------------|-----|
| 八 優しさを求めて…………… | 179 |
|----------------|-----|

|           |     |
|-----------|-----|
| あとがき…………… | 206 |
|-----------|-----|

|              |     |
|--------------|-----|
| ロレンス略年譜…………… | 210 |
|--------------|-----|

|          |  |
|----------|--|
| ロレンス主要文献 |  |
|----------|--|

|    |  |
|----|--|
| 索引 |  |
|----|--|

D  
・  
H  
・  
ロ  
レ  
ン  
ス



## まえがき

『チャタレー夫人の恋人』のなかで、チャタレー夫人が次のような感慨にふけるところがある。『すべての偉大な言葉は私たちの世代においては無意味になった。愛、喜び、幸福、家庭、母、父、夫、これらのすべての偉大な活力に満ちた言葉は今や半ば死にかけている』。「家庭」とは住んでいるところにすぎなくなり、「愛」とははめをはずすほど溺れてはならないものとなり、「幸福」とは他人に虚勢を張るための偽善の言葉となった。「父」とは自分だけの生活を楽しむ個人であり、「夫」とは、精神面でだけ一緒に暮し続ける人のことになった。「偉大な言葉の最後のものである性」はどうかという、しばらくの間だけ景気づけ興奮させるという意味の、安っぽい言葉となってしまった。

最後の小説で夫人が語るこの言葉は、ロレンスが終生抱いていた人間観でもある。この作品の冒頭で「現代は悲劇の時代である」というとき、作者が意味していたものは価値の解体の現実である。作者はさらに言葉を続けて、現代人は「廃墟」のなかにいるというとき、これらの偉大な



言葉の累累たる死骸の山に在ることを意味する。現代人は目的を失い、価値を失い、ただ、刺激とスリルを追うだけになってしまった。刺激が強ければ強いほど大きな満足感を得ることになる。自殺、殺人、暴力、嗜虐等のみが現代人に目的意識らしい幻想を与えることになった。作家としてのロレンスを動かしていた衝動のひとつはこの価値解体の感覚であり、廃墟感であった。

廃墟感とは第一次世界大戦によるものである。戦争の初期にはその成行きにある期待をかけていた時期もあった。当時執筆中であつた作品に、「虹」という題名をつけたことにも期待感が表われている。しかし戦争は長引き大量殺戮へと発展していった。『恋する女たち』の主人公は叫ぶ。「愛が最高だというのは嘘だ。人々が望んでいるものは憎悪だ——憎悪であつて、それ以外の何物でもない」。戦争の現実によつて人間が実際には愛によつて生きていないことをさとらざるを得なかつた。

この事實はロレンスにとつてかなりの衝撃ではあつたが、また、彼に人間認識の出発点を与えている。「憎悪」という現実に対して彼は当然それを肯定することはできない。いつわりの愛を否定しつつ、それに代るものがないか探求しつづける。

ロレンスは生涯キリスト教に反対する立場を取つたが、それはキリスト教に無関心だつたといふことを意味してはいない。想像以上にその精神を受け継いでいるといえる。これは、母親が熱心な清教徒であつたということもひとつの大きな原因になつてゐるだろう。賛成するにしろ反対するにしろ、彼はその伝統のなかに完全につかつていたといえよう。西欧人とキリスト教は切り離せないということは当然ではあるが、ロレンスの場合、他の多くの作家以上に積極的な取り組

み方をしているといえる。「私は本質的に宗教的だ」と語っているが、たしかにその一面がある。しかし、彼は「隣人を愛せよ」という教えをそのまま受け取ることはできなかった。もしそうできたとしたら、彼自身苦しむことはなかったであろう。「隣人を愛せよ」ということ自体を、彼が否定したとは思われないが、しかし、キリスト教的意味においては受け入れることができなかった。なぜできなかったかは、たとえば、『死んだ男』のような肉体を持つて復活したキリストを描いた作品を読むことによって理解することができる。また、キリスト教的愛の実際については、『恋する女たち』のなかでクリッチ氏を通して表現している。

炭坑主のクリッチは、キリスト教的慈善心から貧しい労働者を援助している。たしかにこの方法によって貧しい人々を救うことができればよいであろうが、これには限界があり、また正常な人間関係とはいえない。クリッチの行為は愛に基づくようには見えるが、裏返せば自己の優越感の表現でもある。実際、息子のジェラルドは父の態度をすべて投げ捨て、労働者を単なる機械とみなす立場をとった。もちろん、ここにも真の意味の人間関係は存在しない。他方、労働者の方も、資本家に対して敬意も思いやりもない。資本家と労働者は同じ人間でありながら、人間としての交渉はまったくくない。かつては地主と村民のあいだにはあるつながりがあったという。しかし近代産業の発達の結果、まったく関わりを持たない二種類の人間が生れてしまった。

労資の対立は英国では十九世紀の中頃から先鋭化してきたが、ロレンスも炭坑夫の息子であったから、この問題について無関心でいるわけにはいかなかった。社会主義、共産主義が勢力を得ていく有様も彼は知っていたし、それを作品にも取り上げた。しかし、ロレンスはW・H・オー

デンなど一九三〇年代の作家たちがしたようには政治に走ることはなかった。彼なりの方法で勞資の対立の解消、階級間の対立の融和をはかった。

まだ第一次大戦のはじまらない一九一二年のクリスマスに、ロレンスはこう書簡に書いている。「私はいつも愛の祭司でいることだろう——今は幸福な祭司だ——ぼくは自分の心を語りつくそう」。これはフリーダと同棲生活をはじめた直後であるから、彼が「愛の祭司」と自分をよぶことは当然であろうが、しかしこれはフリーダとの出会いからはじまったとはいえない。それよりかなりさかのぼった時期から「愛の祭司」という主題ははじまっている。少年のとき知った父母の相剋、青年期における恋愛、友情など彼の人生の出発の時点から愛の主題がかなでられているのをきくことができる。成人してからのフリーダとの愛はもちろん中心の主題となる。

結婚に至るまでの恋愛について書いた作品は無数といていいほどあるが、結婚している男女の愛情について書いた作家は意外にすくない。ロレンスはその数すくない作家のひとりといえるだろう。フリーダという新しい女性との結婚生活をとおして得た、自我に目覚めた男女の結婚のあり方をロレンスは深い洞察力でみつめ、それを作品に表現することになった。

ロレンスはど検閲や発禁に苦しめられた作家もすくない。彼は時代にききがけて性の正しい認識と表現を志したのであるが、曲解され、誤解されてしまった。彼にとって性は太陽のようなものであった。汚れたものとして扱ってはならないものであった。もしそれを汚れたものとする人間がいれば汚れているのはその人間の精神であった。彼の死後半世紀になろうとしている今、彼を苦しめた検閲はなく、性は氾濫しているが、彼の目指した性の正しい認識が果して得られたか

には疑問がある。性が商品となっている現実をロレンスは許すことはできない。かつて彼は世間から「わいせつ」という非難を浴びせられたが、今度は逆に同じ言葉を世間に投げ返さなければならぬまい。ロレンスは卒業したというかわりに、もう一度読みなおして、人間生活における性の正しい位置づけを考えなおさなければならぬ時期に来ている。

ロレンスは詩人であり小説家である。彼は小説を「素晴らしき生の書」と呼んで、人間生活の真実を表現するための最高の形式であるとした。哲学や科学は人間生活を「釘づけ」にしてしまふという。一旦「釘づけ」にされたらもはやそれは人生ではない。小説は人間生活を微妙なパランスのままに表現できるという。したがって人間関係はロレンスの場合、定理のように記述されるのではなくて、作品を読むという経験のなかで感じとられるものである。生そのものが多様で無限の深みを持っているようにロレンスの作品も生そのもののように多くを語りかける。

## 一 想像力の根

ロンドンから急行列車で北へ二時間行くとノッティンガムという都市に着く。この辺はイングランド中部地方とよばれているが、ノッティンガムから、さらに西北十三キロほどの所にイーストウッドという町があり、そこにロレンスは生れた。

ロンドンからほぼ平地が続いているが、この付近から少しずつ丘陵が現われ、さらに北部に行くにつれて丘陵は高くなり、ペニン山脈へと連なる。ロレンスの生れたイーストウッドの町は、これらの丘陵のひとつの上にある。全体としては農村地帯であり、小麦畑や牧草地がひろがっているが、また、炭坑もその間に散在している。現在でもノッティンガム付近には五つほどの名の知れた炭坑がある。ロレンスの父親がかつて働いていたプリンスリー炭坑もそのなかのひとつであった。

十一世紀に英国を征服したノルマン人のつくった土地台帳には、イーストウッドは「エストウィック」として出ている。数百年のあいだイーストウッドは小さな村であり、一七八〇年代でさ

え戸数二十八を数えるにすぎなかったが、産業革命の結果、急速に大きくなってきた。石炭の出ることは十六世紀から知られており、ロバを動力に使って採掘が細々と続けられていた。大規模に採掘されるようになったのは、バーバー、ウォーカー会社が一八〇〇年ごろ設立されてからであった。石炭を運び出すための鉄道や運河がつくられ、よその土地から高い賃金を目当てに、労働者が集って来るにつれてイーストウッドは大きくなっていった。一八〇一年の人口は七百三十五人であったが、ロレンスの生れた一八八五年には約四千人であった。炭坑労働者のための住宅が建てられ、ロレンス一家はそこに住むことになった。

産業資本家が石炭を大規模に発掘するようになるにつれて、美しい自然はよごされていった。ぼた山ができ、炭塵が落ち、付近を黒くよごしてしまふのである。これが、ロレンスに近代産業は美しい自然を破壊するという認識をうえつけることになった。しかし、イーストウッド付近においては、炭坑は地域的にかぎられており、広い自然が残っていた。ロレンスが少年時代を過ごしたのは、このイングランド中部地方の美しい自然のなかであった。特にイーストウッドの北方にあたるムアグリーン貯水池と、その付近の森や岡は彼の心に深く刻みこまれた。景色そのものとしてはそれほど変化に富んでいるとはいえない。しかし、池、小川、丘陵、森、小麦畑、牧草地は彼の自然に対する感受性をはぐくむに十分であった。ロレンスが四十四歳のとき、すなわち、彼の死の直前に書いたエッセイ「ノッティンガムと炭坑村」<sup>(1)</sup>でもイーストウッド付近を「この上なく美しい田園地帯」とよび、少年時代を過ぎた自然をなつかしく回想している。二十歳を少しすぎたころ彼は故郷を離れ、その後はイーストウッドに長く滞在することはなかったが、故郷の

自然は彼の心の中に生き続け、彼の想像力をはぐくんでいた。ロレンスは処女長編小説を、ムアグリーン貯水池とそれを取り巻く森の描写ではじめたが、その後の小説においても形は変るが、少年時代に接した自然は現われてくる。イーストウッド付近は彼の想像力の故郷といつてよい。

デヴィッド・ハーバート・リチャーズ・ロレンスは一八八五年九月十一日に生れた。父方の祖父ジョン・ロレンスは仕立屋で、一八五三年ごろイーストウッドの北のプリンズリーに店を構え、付近の炭坑の坑夫たちの作業服を仕立てたりしていた。ロレンスは子供心に、祖父の店に積んであった作業服の生地や旧式のミシンのことを憶えている。祖父は巨漢でスポーツにすぐれ、若いころはトレント河でのボート競争やボクシングで有名であった。

父、アーサー・ジョン・ロレンスは一八四六年六月十八日に生れた。自然がロレンスの想像力をはぐくんだことはすでに述べたところであるが、父と母と、また、その関係が作家の精神形成に重大な影響を持っていることは今更いうまでもないことである。ロレンスは他の作家以上に自分の血の中に流れている父的なものと母的なものを強く意識し、また、父母の関係から自分の負わされている宿命を自覚した作家であった。

父は七歳のときから炭坑に入り、生涯その仕事を続けた。頑健な身体の主主であったが、当時の他の炭坑夫と同じように教養はなく、新聞をかるうじて拾い読みする程度であった。若いころはダンスをよくし上手でもあった。朝はおそくとも五時には起きて自分で朝食をつくって食べ、弁当まで用意して出かけて行き、日中、坑内で働き、夕方帰宅する途中酒場に寄って一杯飲んで来るという毎日であった。上役と喧嘩して採掘量の少ない場所を割り当てられることはあっても、

怠惰な坑夫ではなかった。腕はたしかで難しい仕事では援助を求められることもあった。のちに組頭（バティ）になった。これは三、四人の坑夫を配下にして採掘を請負い、会社からもらった採掘代を坑夫にわけてやる地位であった。従って平の坑夫よりは一段上で収入も多かった。つらい仕事ではあったが、彼は彼なりの方法で毎日を楽しんで送っていた。息子を、また、炭坑に入れようとしたところを見ると、坑夫の生活にそれほど不満であったとも思われない。つらい坑内での仕事の埋め合わせに、坑外での余暇を楽しんでいたといえよう。

また、彼は手先が器用であった。鉄製の火かきを妻のためにつくってやったり、なべやかまを修繕したりすることをいやがらなかった。炭坑に行く途中できのこを取ったり、子兎を見付けて子供たちのために家に持ちかえったり、面白おかしく話をしてやったりするときもあった。自分の手に届かぬものを無理して求めることなく、自分に許された範囲内で日々を享受していくという態度であった。

少年時代のロレンスは父を嫌っていた。他方、彼は母に愛着していた。この頃の彼の生活は母と切り離しては考えられないし、また、その後の精神的成長を見る場合も、母との深いかかわり合いを考えなければならない。

母、リディア・ピアズオールは一八五二年七月十九日に生れている。リディアの父、ジョージ・ピアズオールは、はじめノッティンガムで織物器具製造の仕事をしていたが、のちイングランド南部の港町シアネスのドックで技師として働いた。彼は、また熱心な清教徒で、聖パウロを崇拜し、実際に説教壇に立って説教したこともあった。娘のリディアも厳格な教育を受けた。



リディアの母のリディア・ニュートンの母方の祖父、ジョン・ニュートン（一八〇二—一八八六）は賛美歌の作詞家として著名であり、現在でも彼の作詞したものが非国教徒の教会で歌われているほどである。ロレンスは賛美歌を好んでいたが、それはこの血筋によるものであろう。

ロレンスの母、リディアは少女時代をシアネスの港町で過した。父の働く港の防波堤を走りまわって遊んだこともあった。そこで小学校の教師をしたこともある。詩を書いたこともある。ノッティンガムでアーサー・ジョンと知り合い、一八七五年十二月二十七日に結婚した。はじめて会ったのは双方の親戚の家であった。ロレンスの父は、一時プリンズリーを離れて、ノッティンガム近くの炭坑で働いていたが、そのとき市内に住む叔母の家をよく訪問した。この叔母はリディア・ピアズオール叔父と結婚していたのである。

『息子と恋人』には、二人がどのように互いに惹かれたかが描かれている。アーサー・ジョンはリディアが「貴婦人」らしいのに魅力を感じた。彼女はイングランド南部の標準英語を話した。それを聞くと彼はぞくぞくするような魅力を感じた。炭坑地帯ではお目にかかることがないような女性であった。他方、リディアは炭坑夫に、これまで知っていた男性にないものがあることに気付いた。ダンスはうまく、均整のとれた体つきをしている上に、陽気でよく笑い、冗談がうまく、本当に生き生きとした感じであった。「生命の焰」が肉体から立ちのぼるような気がした。彼女の父親もユーモアがあったが、清教徒の父とはまったくちがう、底抜けに明るいユーモアが炭坑夫にあった。

要するに二人は、自分にはないものをお互いのなかに発見してそれに惹かれて結婚したのであ